

－ 資 料 －

## パーソナリティーとコミュニケーション様式の 自己認識との関連

福 井 愛 美

The Relevance of Self-Awareness in Personality and Communication

Aimi FUKUI

### 要 旨

コミュニケーションに関する考えや態度には、性格傾向の関与が考えられる。特に内向－外向という特性の影響は大きいものと思われる。この特性は遺伝の影響が50%ほどであると推測されており、他の因子同様その人が持っている先天的な特徴であると言える。このような中で、社会ではコミュニケーション能力が大きく注目され、企業が学生を採用する際にコミュニケーション能力を重視しているという状況では、内向的な人はより大きな苦手感を持ちやすいのは否めないであろう。

本研究はそのような苦手感を持ちやすいであろう内向的な人たちに対して、どのように関わるのが、それぞれの性格特徴に沿った教育となるかを検討するための基礎データとして、性格傾向とコミュニケーションに対する意識とを調査したものである。

キーワード：パーソナリティー特性，外向，内向，コミュニケーションスタイル

### 1. はじめに

企業の求める人材として、チャレンジ精神や協調性、責任感などと並んでコミュニケーション能力の高さが毎年上位に挙げられている。2014年1月9日に「日本経済団体連合会」が発表した新卒採用（2013年4月入社対象）アンケート調査結果<sup>1)</sup>によると、採用選考時に重視する要素は10年連続でコミュニケーション能力が第1位であった。

しかし「コミュニケーション能力が高い」とは具体的にどのような能力を持っていることを指しているのだろうか。また何を基準に、その能力が高いと判断しているのだろうか。

「日本経済団体連合会」がいうところのコミュニケーション能力とは、自分の考えをきちんと説明する能力や人の話を聞いて理解する能力、周囲の状況を読みとりさらに深く考える能力などが複合し連動している事を指しているのではないかと考える。それらを踏まえ、大学教育においても、コミュニケーション能力の育成は中心的な課題のひとつで、さまざまな取り組みが行われている。たとえば、相手を説得したり、納得させたり、どのように同意させるかとい

う説得的コミュニケーションに力点を置き、そのための傾聴にも比重を置いてコミュニケーション能力を育成しているが、実はこれらは能力というよりも、スキルとして細分化され学習可能な形に還元され、教育しているのではないか。それはそれで有効であるが、大学という場では、このような企業研修スタイルをそのまま踏襲するのではなく、技術修得の場と共により広い人間的成長という視点をその背後に持っているべきであろう。

一般的に認知されているコミュニケーション能力が高い人とは「親しみやすい」「誰とでも話せる」「いつも明るい」「積極的である」「気遣いが上手い」などのことばをあてはめて考えられている。つまりこれらは概して外向的な人の特質を表しているともいえる。

安藤（2012）によると、外向性という性格特性は、他の性格特性と同様に約50%が遺伝的な影響を受け、残りはそれぞれ固有の環境（非共有環境）の影響を受け、その一方でいわゆる生育環境の影響はほとんど見られないことがわかっている<sup>2)</sup>。遺伝の影響が50%前後ということで見れば、外向的な人に育てようという教育的環境の影響力が及ぶ範囲は期待するほど大きくない可能性が高い。生まれた後の環境によって大きく性格特性が変化するとは言いがたいということである。にもかかわらず外向的であることが就職において大きな要素を占めている状況に対して、特に内向的と思われる人はどのような対応が可能であろうか。一つは、スーザン・ケインの指摘にあるように、外向的な特質を持つことが理想であるという考えを社会全体が疑うようになることである。「外向型の人間を理想とする考えを、そのまま鵜呑みにするのは大きな間違いだ」<sup>3)</sup>、という認識、すなわち外向的性格と内向的性格は補い合うものだと皆が思うようになることである。もう一つは、内向的であるためコミュニケーションが苦手だと感じている人たちに対し、有効な教育法や援助を考えることであろう。内向的であっても比較的コミュニケーションが上手で、プレゼンテーションなどが苦にならないような人との違いを知る必要がある。もしそこに外向性以外の何らかの要因が見つかれば、コミュニケーションが苦手と感じる内向的な人への有効な教育や援助のための手がかりが得られるものと思われるからである。

## 2. 調査方法

### (1) 調査の目的

各自の性格傾向に基づいたコミュニケーション能力の多様性とその意味や有効性および成長をとらえるために、パーソナリティとコミュニケーション様式の関連に関するアンケート調査を行い、分析する。

### (2) 調査の対象

#### ①入職初期の職員100名（初級歯科助手として勤務）

初級歯科助手として入職初期の接遇研修講座にて、事前に主催者の了解を得て筆者が行っ

た研修終了後、主旨説明ののち協力を得られた者にアンケートを実施した。調査は研修の最後に行った。

②本学総合生活学科在籍中の1年次生91名

本学の学生には授業終了後、アンケートの主旨を説明し協力者を募って実施した。

### (3) 調査時期

①は平成26年6月、②は平成26年7月に実施した。

### (4) 調査内容

対象者に対して、a) 5因子性格の70項目、b) コミュニケーションに関する考えや態度の29項目(①にはそのうち最初の27項目のみ)の回答を行った。

a) 5因子性格検査は村上<sup>4)</sup>に基づいた。内容は、受検態度に関する2項目(FおよびAtt)と性格特性に関する5項目(外向性E, 協調性A, 誠実性C, 情緒安定性N, 知性O)で、各項目の素点を集計後、マニュアルに従いF項目は4段階、それ以外は5段階の段階

表1 コミュニケーションに関する考えや態度の29項目

No.	質問項目
1	比較的いつもリラックスして話ができる。
2	なかなか言葉が出てこない感じがして気後れする。
3	余計なことを言わないように気を遣いすぎてしまう。
4	話がおもしろいと言われるとうれしくなる。
5	人前で話している自分は、普段よりハイテンションになっていると感じる。
6	相手の目を見て話すのはどちらかという苦手だ。
7	比較的身振り手振りを交えて話していると思う。
8	表情豊かに話すよう意識している。
9	プレゼンテーションするのは、比較的上手な方だと思う。
10	相手の話をよく聞く方だと感じる。
11	にぎやかな場所で人と話すのはわりと好きだ。
12	雑談などでもグループで話すよりは1対1の方が話しやすいと感じる。
13	懇親会などで人と話すのは好きな方だ。
14	自分が相手よりたくさん話すと、何となく落ち着かない気持ちになる。
15	人とは比較的ゆっくりと話すことが多い。
16	緊張すると汗をかきやすいように思う。
17	ほどよく緊張している方がうまくコミュニケーションがとれると感じる。
18	初対面の相手を好意的に感じる人が多い。
19	うまく会話ができたときのことよりも、できなかったときのことをよく思い出す。
20	もっと自信を持って話ができるといいと思うことが多い。
21	口べたな人と話すといらいらしやすいように思う。
22	練習したら話し上手になれると思うことが多い。
23	聞き上手になる方が向いているように思う。
24	自分の表情は柔らかい方だと感じる。
25	やり方を聞かれるとかなり熱心に教える方だと思う。
26	グループディスカッションでは比較的良好に話す方だと思う。
27	自分の考えをうまく伝えたいと思いながら話すことが多い。
28	相手がどう受け取るか気になってなかなか意見が言えない。
29	自分がどう見られているかを気にする。

評定に換算した。F項目は、1 低得点、2 平均、3 やや高得点、4 高得点、それ以外は1 低得点、2 やや低得点、3 平均、4 やや高得点、5 高得点、とした。

b) コミュニケーションに関する考えや態度の29項目は表1の通りで、すべて、はい・いいの2件法で回答を得た。

### 3. 調査結果

#### (1) 5因子性格検査の結果

回答が得られた①歯科助手 100名(女性98名 男性1名 不明1名)②短期大学生 91名(女性91名)のうち、5因子検査および年齢、性別のデータに欠損のない、女性179名(歯科助手94名、短大生85名)を分析対象とした。

5因子検査は、年齢によって素点からカテゴリに変換する際の値に違いがあり、12歳～22歳、23歳～39歳、40歳～59歳、60歳以上で区分されている。今回の調査対象者は、22歳以下118名、23歳～39歳が48名、40歳～59歳が13名であった。短期大学生は全員が22歳以下であった。なお分析の集計はExcel2010、統計的検定はSPSS ver20で行った。

受検態度に関するF得点とAtt得点について検討したところ、全体ではF得点平均が1.94とほぼ平均的得点2点に近く、Att得点も平均2.60と3点以下であった。全体で見るとおおむね回答態度には問題はないと思われる。しかし対象者①ではF得点で低得点(1点)が31名、高得点(3点以上)が13名であり、やや率直ではない回答態度が見られた。またAtt得点で94名中17名が4点以上で、18%ほどが社会的望ましきにかたよった回答をしている可能性が見られた。同様に対象者②ではF得点で低得点が15名、高得点が18名おり、またAtt得点では、85名中11名(13%)が4点以上であった。今回の分析ではF得点が平均点外の回答者およびAtt高得点者も分析対象に含めた。

Attおよび5因子の得点間相関は表2の通りとなった。

ほとんどの項目間に有意な正の相関が見られた。5因子間の相関は勤勉性と知性の0.492が最も大きく、それでも中程度の相関であったので、それぞれの因子はある程度独立であると言えるだろう。Attと5因子の間には最大で外向性との間に0.616の正の相関が見られた。今回の調査では外向性が高いとやや建前的回答が増える傾向があることが示唆された。

表2 Attおよび5因子の相関係数

	Att	外向性	協調性	勤勉性	情緒安定性	知性
Att		.616**	.401**	.398**	.501**	.476**
外向性			.331**	.247**	.274**	.267**
協調性				.378**	.228**	.151*
勤勉性					.146	.492**
情緒安定性						.230**
知性						

n=179 \*\*<0.01

## (2) 5因子性格検査とコミュニケーションに関する考えや態度(29項目)の関係

コミュニケーションに関する考えや態度29項目の回答と5つの性格因子との関連について検討した。29項目の、はいといいえのそれぞれの回答者の5因子のカテゴリ得点の平均点を比較し、その差が絶対値で0.6以上で、かつそのときの平均点が同一カテゴリの得点でない項目を取り出したところ、表3の通りとなった。

表3 5因子の特性に差が見られた項目

1 比較的いつもリラックスして話ができる。							
	F	Att	外向性	協調性	勤勉性	情緒安定性	知性
はい	1.69	3.02	3.39	3.52	3.17	3.10	2.81
いいえ	2.18	2.18	2.45	3.07	2.88	2.48	2.38
差	-0.48	0.85	0.94	0.46	0.29	0.62	0.42
2 なかなか言葉が出てこない感じがして気後れする。							
	F	Att	外向性	協調性	勤勉性	情緒安定性	知性
はい	2.17	2.20	2.42	3.19	2.84	2.46	2.36
いいえ	1.71	2.98	3.40	3.39	3.20	3.11	2.82
差	0.46	-0.78	-0.98	-0.20	-0.36	-0.65	-0.46
3 余計なことを言わないように気を遣いすぎてしまう。							
	F	Att	外向性	協調性	勤勉性	情緒安定性	知性
はい	2.08	2.36	2.68	3.15	2.98	2.43	2.56
いいえ	1.75	2.91	3.22	3.49	3.08	3.28	2.63
差	0.33	-0.55	-0.54	-0.34	-0.10	-0.85	-0.07
4 話がおもしろいと言われるとうれしくなる。							
	F	Att	外向性	協調性	勤勉性	情緒安定性	知性
はい	1.92	2.65	3.00	3.27	3.01	2.81	2.63
いいえ	2.04	2.23	2.38	3.42	3.12	2.65	2.38
差	-0.12	0.42	0.62	-0.16	-0.11	0.16	0.24
6 相手の目を見て話すのはどちらかというと苦手だ。							
	F	Att	外向性	協調性	勤勉性	情緒安定性	知性
はい	2.15	2.18	2.42	3.05	2.69	2.51	2.43
いいえ	1.82	2.82	3.19	3.43	3.21	2.95	2.68
差	0.34	-0.64	-0.78	-0.38	-0.52	-0.44	-0.25
9 プレゼンテーションするのは、比較的上手な方だと思う。							
	F	Att	外向性	協調性	勤勉性	情緒安定性	知性
はい	1.68	3.23	3.36	3.23	3.68	3.05	3.32
いいえ	1.97	2.50	2.85	3.30	2.93	2.75	2.49
差	-0.29	0.72	0.52	-0.07	0.75	0.29	0.83

11にぎやかな場所で人と話すのはわりと好きだ。

	F	Att	外向性	協調性	勤勉性	情緒安定性	知性
はい	1.84	2.76	3.25	3.38	3.11	2.88	2.60
いいえ	2.08	2.36	2.44	3.16	2.91	2.67	2.59
差	-0.24	0.40	0.81	0.22	0.20	0.21	0.01

19うまく会話ができたときのことよりも、できなかったときのことをよく思い出す。

	F	Att	外向性	協調性	勤勉性	情緒安定性	知性
はい	1.94	2.40	2.81	3.27	3.08	2.51	2.53
いいえ	1.93	2.86	3.05	3.32	2.95	3.16	2.67
差	0.01	-0.46	-0.25	-0.04	0.13	-0.64	-0.14

20もっと自信を持って話ができるといいと思うことが多い。

	F	Att	外向性	協調性	勤勉性	情緒安定性	知性
はい	2.00	2.41	2.78	3.26	2.99	2.66	2.58
いいえ	1.79	3.04	3.23	3.37	3.10	3.10	2.62
差	0.21	-0.63	-0.45	-0.11	-0.10	-0.43	-0.03

24自分の表情は柔らかい方だと感じる。

	F	Att	外向性	協調性	勤勉性	情緒安定性	知性
はい	1.75	2.82	3.23	3.49	3.08	2.89	2.66
いいえ	2.14	2.36	2.57	3.08	2.97	2.68	2.52
差	-0.39	0.46	0.65	0.41	0.11	0.21	0.15

26グループディスカッションでは比較的良好に話すと感じる。

	F	Att	外向性	協調性	勤勉性	情緒安定性	知性
はい	1.70	3.00	3.64	3.58	3.27	2.88	2.85
いいえ	1.99	2.50	2.75	3.23	2.97	2.77	2.53
差	-0.30	0.50	0.89	0.35	0.31	0.11	0.31

28相手がどう受け取るか気になってなかなか意見が言えない。

	F	Att	外向性	協調性	勤勉性	情緒安定性	知性
はい	2.03	2.11	2.38	3.08	2.84	2.38	2.46
いいえ	2.08	2.77	3.10	3.19	2.98	2.98	2.52
差	-0.06	-0.66	-0.73	-0.11	-0.14	-0.60	-0.06

29自分がどう見られているかを気にする。

	F	Att	外向性	協調性	勤勉性	情緒安定性	知性
はい	1.98	2.42	2.71	3.15	3.00	2.53	2.45
いいえ	2.32	2.68	3.05	3.11	2.63	3.37	2.63
差	-0.33	-0.26	-0.34	0.05	0.37	-0.84	-0.18

「1 比較的いつもリラックスして話ができる。」の外向性得点は「はい」が3.39, 「いいえ」が2.45で、内向的傾向が高いとリラックスしにくい感じがあることが示された ( $t(177)=6.813, p<0.01$ )。また情緒安定性得点は、「はい」が3.10, 「いいえ」が2.48で同様に有意差が見られた ( $t(177)=4.369, p<0.01$ )。

「2 なかなか言葉が出てこない感じがして気後れする。」の外向性得点は「はい」が2.42, 「いいえ」が3.40で外向性が平均的であればあまり気後れしないと感じているという結果となった ( $t(177)=-7.269, p<0.01$ )。また情緒安定性得点は「はい」が2.46, 「いいえ」が3.11で情緒安定性が低い方が気後れしやすいという結果となった ( $t(177)=-4.520, p<0.01$ )。

「3 余計なことを言わないように気を遣いすぎてしまう。」の情緒安定性得点は「はい」が2.43, 「いいえ」が3.28で情緒安定性が低いことと気を遣いすぎる傾向とに有意な関係が見られた ( $t(177)=-6.207, p<0.01$ )。

「4 話がおもしろいと言われるとうれしくなる。」の外向性得点は「はい」が3.00, 「いいえ」が2.38であり, 外向性が平均的だと聴衆の反応をうれしく感じるが, 内向的になるとあまりうれしく感じない人が増えることが示された ( $t(29.743)=2.313, p<0.05$ )。ただしこの差は他の項目に見られる差より, やや小さいものであった。

「6 相手の目を見て話すのはどちらかという苦手だ。」の外向性得点は「はい」が2.42, 「いいえ」が3.19であり, 目を見て話すことが苦手と感じる人ほど内向的であることが示された ( $t(177)=-5.205, p<0.01$ )。

「9 プレゼンテーションするのは, 比較的上手な方だと思う。」については勤勉性得点と知性得点で差が見られた。勤勉性得点は「はい」が3.68, 「いいえ」が2.93であり, 勤勉性がやや高いに近い方がプレゼンテーションは比較的上手であると自己認識していた ( $t(177)=3.754, p<0.01$ )。また知性については, 「はい」が3.32, 「いいえ」が2.49で, プレゼンテーションが比較的上手であると認識している人は, 知性(5因子性格理論で言う知性は, 開放性とも言われ, 内発的動機付けや好奇心が高く, 色々なことに興味を持つ特徴がある)が平均的であり, 逆に好奇心が低めの人にはプレゼンテーションも上手であるとはあまり感じていないことが示された ( $t(177)=4.118, p<0.01$ )。

「11にぎやかな場所で人と話すのはわりと好きだ。」の外向性得点は「はい」が3.25, 「いいえ」が2.44であり, 有意差が見られた ( $t(177)=5.624, p<0.01$ )。

「19うまく会話できたときのことよりも, できなかったときのことをよく思い出す。」は情緒安定性で差が見られ, 「はい」は2.51, 「いいえ」は3.16であった ( $t(177)=-4.505, p<0.01$ )。情緒安定性が低い人は, 失敗したときのことをずっと気にしている傾向が高いことが示された。

「24自分の表情は柔らかい方だと感じる。」は「はい」は外向性が3.23, 「いいえ」は2.57であった。やや内向的な方が表情の硬さを感じているという結果となった ( $t(177)=4.466, p<0.01$ )。

「26グループディスカッションでは比較的良好に話す方だと思う。」は「はい」の外向性得点が3.64, 「いいえ」が2.75であり, よく話す傾向の人は外向的傾向も高いことが示された ( $t(177)=4.749, p<0.01$ )。

「28相手がどう受け取るか気になってなかなか意見が言えない。」については, 「はい」の外向性得点は2.38, 「いいえ」は3.10で外向的傾向が平均的な人は, 相手の受け取り方をあまり

気にしすぎずに意見を言える傾向が高いことが示された ( $t(77.802)=-3.277, p<0.01$ )。なおこの項目では、情緒安定性にも有意差があり、「はい」は2.38、「いいえ」は2.98で情緒安定性が低いほど相手にどう思われるかを気にしやすい傾向も示された ( $t(83)=-2.876, p<0.01$ )。情緒安定性が高いということは、神経症傾向が低いということの意味しており、あまり神経質ではないということを表している。ただし得点自体がどちらも2点台であるため今回は取り上げないこととした。

「29自分がどう見られているかを気にする。」については、情緒安定性で差が見られた。「はい」の得点は2.53、「いいえ」は3.37で有意差が見られた ( $t(83)=-3.436, p<0.01$ )。情緒安定性の高い人は自分がどう見られているかをあまり気にしない傾向があることが示された。

以上のことから、5因子特性のいずれかに差が見られた項目は29項目中12項目で、そのうち外向性で差が見られたものは「1比較的いつもリラックスして話ができる。」「2なかなか言葉が出てこない感じがして気後れする。」「4話がおもしろいと言われるとうれしくなる。」「6相手の目を見て話すのはどちらかという苦手だ。」「11にぎやかな場所で人と話すのはわりと好きだ。」「24自分の表情は柔らかい方だと感じる。」「26グループディスカッションでは比較的よく話す方だと思う。」「28相手がどう受け取るか気になってなかなか意見が言えない。」の8項目であった。一方、外向性以外の4因子でも差が見られたのは「1比較的いつもリラックスして話ができる。」「2なかなか言葉が出てこない感じがして気後れする。」「3余計なことを言わないように気を遣いすぎてしまう。」「9プレゼンテーションするのは、比較的上手な方だと思う。」「19うまく会話ができたときのことよりも、できなかったときのことをよく思い出す。」「29自分がどう見られているかを気にする。」の6項目であった。外向性と他の4因子と両方で差が見られたのは、そのうち1と2の2項目であった。性格特性に関しては外向性との関連が強く見られ、外向性はコミュニケーションにある程度の影響を与えていることが示唆された。

外向性以外の性格因子の結果については、まず情緒安定性は5項目で差が見られ、その傾向は外向性とほぼ同じものであった。外向性得点と情緒安定性得点との得点自体の相関係数は他の項目間相関と比べても0.274と有意ではあるがさほど強いとは言えなかった。

勤勉性と知性に差が見られたのは「9プレゼンテーションするのは、比較的上手な方だと思う。」のみであった。この項目では外向性得点にも有意差が見られ ( $t(177)=2.229, p<0.05$ )、また「はい」は3.36、「いいえ」は2.85と3点台と2点台という差も見られたが、平均値の差自体が0.52と他に比べてやや少ないものとなった。

受検態度における建前の程度を測る Att は「1比較的いつもリラックスして話ができる。」「9プレゼンテーションするのは、比較的上手な方だと思う。」で「はい」の方が高く、「20もっと自信を持って話ができるといいと思うことが多い。」「28相手がどう受け取るか気になってなかなか意見が言えない。」では「はい」の方が低かった。



#### 4. 考察

29項目のうち外向性との関連が示されたのは8項目であった。この8項目について外向性特性の5段階と回答傾向の詳細を検討した(図1)。どの図も縦軸は回答者人数で、横軸は外向性の5段階を示している。

「28相手がどう受け取るか気になってなかなか意見が言えない。」以外は、外向性得点はいずれも平均(3)が最も人数が多く、両端に行くほど少なくなっていくきれいな釣り鐘型の分布であった。平均(3)を境に、左右で「はい」「いいえ」の回答者数に逆転傾向が見られたのは、「1比較的いつもリラックスして話ができる。」「2なかなか言葉が出てこない感じがして気後れする。」「6相手の目を見て話すのはどちらかというと苦手だ。」「11にぎやかな場所で人と話すのはわりと好きだ。」「24自分の表情は柔らかい方だと感じる。」であり、「1」「11」「24」は外向性が低得点側で「いいえ」が多く、「はい」は高得点側が多くなった。一方「2」「6」は低得点側に「はい」が多く、高得点側では「いいえ」が多かった。

「4話がおもしろいと言われるとうれしくなる。」は外向性がどの段階でも「はい」が多かった。逆に「26グループディスカッションでは比較的よく話す方だと思う。」は外向性がどの段階でも「いいえ」が多かったが、「はい」は平均から高得点側に見られた。「28相手がどう受け取るか気になってなかなか意見が言えない。」は、外向性がやや低い人に「はい」が多く、平均(3)のところで逆転していた。高得点側には「いいえ」が多かった。

前述のように5因子の性格傾向の内、外向性指標は29項目中8項目と関連が見られ、これは他の4因子と比べても多かった。外向性は5因子の他の4因子同様、約40%~60%が遺伝の影響で、残りは環境の影響を受けると考えられている。さらに内向性-外向性はさまざまな性格特性に関する研究でも比較的安定して抽出される特性である。そのため、コミュニケーション場面になんらかの苦手感があると、それらは比較的抽出されやすい性格傾向である内向性-外向性と結びつけられやすい、という面も考える必要がある。外向性が他の因子よりもコミュニケーションについての考えや態度に影響していることが示唆されたことはさらに検討する必要があるのではないか。また外向性との関連が見られた8項目の内2項目は情緒安定性すなわち神経症傾向の少なさとも関連が見られ、その方向は外向性と同じものであった。外向性と情緒安定性は他の組み合わせの相関に比べて飛び抜けて高いわけではない。よって、今回の結果から、外向性と情緒安定性に類似傾向が見られたということは、この組み合わせについても検討する必要があることを示している。

性格因子ではないが、性格検査に臨む態度、特に建前で回答している傾向については4項目と関連が見られた。建前と本音を適切に使い分けるということは、社会活動を円滑に行うにはそれなりに必要な能力であると言えるが、そう考えると、コミュニケーションに対する苦手意識の中には、本音と建て前の使い分けができないという、一種の未熟さも関連していると考えられる必要があると思われる。

情緒安定性は5項目で差が見られ、その傾向は外向性とほぼ同じものであった。外向性得点と情緒安定性得点との得点自体の相関係数は他の項目間相関と比べても0.274と有意ではあるがさほど強いとは言えないことと合わせて、コミュニケーションに関する考えや態度にはまず外向性の程度と情緒安定性が関連して関わっていることが示唆された。

「9プレゼンテーションするのは、比較的上手な方だと思う。」では外向性得点に有意差が見られた。この項目の特徴は、他の項目では差の見られなかった勤勉性と知性に差が見られたことである。プレゼンテーションが上手であると思うかどうかは、外向性にも関連がありそうだが、それ以上にまめな準備や興味関心の広さの影響も見られるということが示された。

受検態度における建前の程度を測る Att 得点自体は、4点以上の時に建前で回答している傾向が高いことを考慮することになっている。そのため差があったとはいえ、いずれも4点以下であるので問題にすべきではない。その上で傾向として見てみると、リラックスして話がで

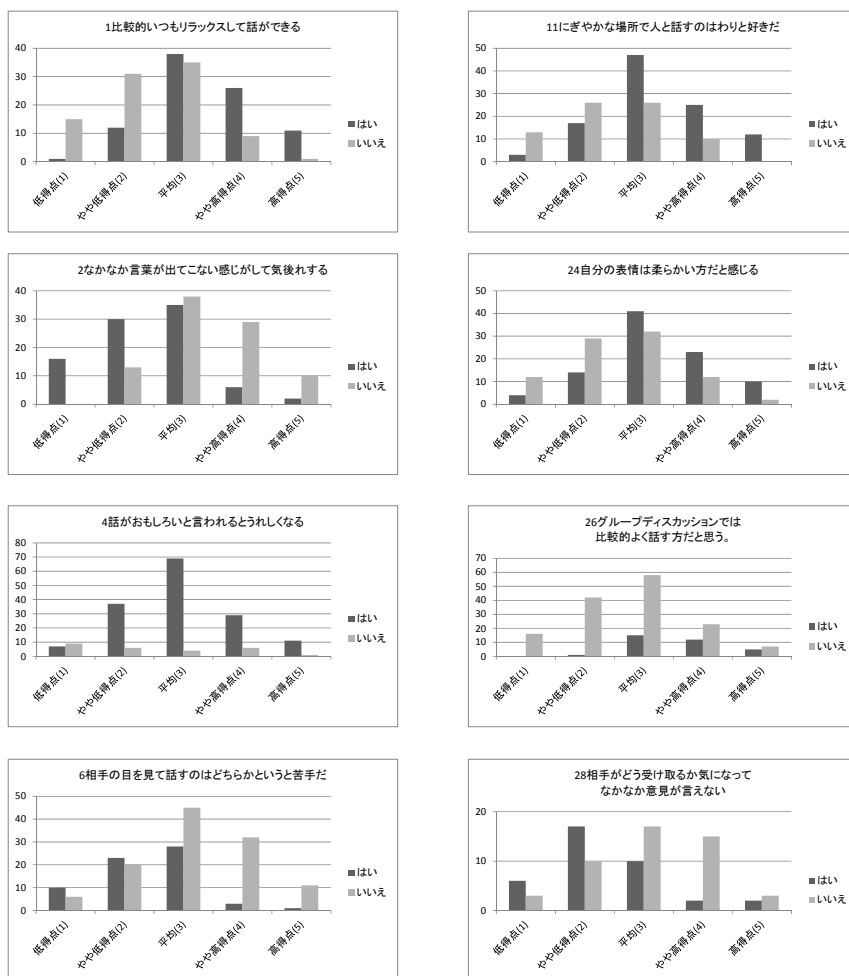


図1 外向性得点で差のあった8項目の段階別回答者数

きと思っている人の方が、やや建前的で、また相手がどう受け取るかを気にしている人ほど建前傾向が少ないという結果となり、ある程度建前と本音が使い分けられることもコミュニケーションにおいて何らかの役割を果たしていることが推測される結果となった。

## 5. 今後の課題

コミュニケーション様式についての自己認識はその人の性格傾向、特に外向性と関連が見られることが示された。一般にコミュニケーション能力の高さは外向性の特性と重なるところが多いため、ある程度妥当な結果となったと言えるだろう。一方、外向性の特性だけが関係があるわけではないことも示された。まず本研究における分析は、5因子をそれぞれ個別に扱ったが、性格傾向をより詳細にとらえるには、5因子の組み合わせを用いる必要がある。また今回はあくまでコミュニケーション様式の自己認識を問題としており、実際にその人がどのようなコミュニケーションを取っているかという具体的な面については扱っていない。これらのことは今後の課題としたい。

## 引用文献

- 1) <https://www.keidanren.or.jp/policy/2014/001.html> (2014年9月現在)
- 2) 安藤寿康『遺伝子の不都合な真実』ちくま新書 2012 p.74
- 3) Susan Cain『内向型人間の時代 社会を変える静かな人の力』古草秀子訳 講談社 2013 p.8

## 参考文献

- 4) 村上宣寛・村上千恵子『性格は五次元だった—性格心理学入門』培風館 1999